



Title	大阪大学文学部国文学研究室蔵 後鳥羽院御集（翻刻） 一
Author(s)	山本, 一
Citation	語文. 1985, 45, p. 49-68
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/68732">https://hdl.handle.net/11094/68732</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 大阪大学文学部国文学研究室蔵

## 後鳥羽院御集 (翻刻) 一

山 本 一

### 書 誌

列帖装二冊。原装本。縦二一ミリ、横一四七ミリ。上下冊とも白地銀泥菊華唐草文の表紙で、左肩に白地銀泥亀甲文の短冊題簽を貼り「後鳥羽御集上」「後鳥羽御集下」と墨書（原題簽）。内題は上下冊とも目録のあとに「後鳥羽院御家集」とする。本文料紙は鳥の子。上冊は墨付七十七丁、遊紙前一丁、後二丁。下冊は墨付八十三丁、遊紙前後各一丁。一面十行で和歌一首一行書き。上冊表紙右肩、下冊卷末に「西莊文庫」、各冊前遊紙表の右下に「鈴屋之印」の朱色の蔵書印あり。奥書はない。書写年代は近世初期（そのうちでは後半）か。

### 翻刻の方針

- 一、漢字体は原則として新字体による。
- 一、行間書入れ、集付等については、和歌一首が書き入れられている場合は7ボ活字、他は6ボ活字により翻刻する。
- 一、丁の表裏の終りに「を」を付し、1才等と丁数を示した。
- 一、歌番号は歌の頭に漢数字で付した。

### 後鳥羽御集上（題簽）

一、右二項以外の翻刻者の注記は全て（註）で包んだ。

正治二年八月御百首 人々多詠之

同第二度御百首月日未勘

建仁元年三月内宮御百首

同外宮御百首

同六月千五百番御歌合百首

建保四年二月御百首

春百首御歌

夏五十首御歌

秋百首御歌

冬五十首御歌 1才

恋百首御歌

雑百首御歌

御百首

遠島御百首

〔六行分空白〕 1ウ

後鳥羽院御家集

正治二年八月御百首

春 二十首

人々多詠之

- 一 いつしかとかすめる空のけしきにて行末遠し今朝の初春
- 二 春きても猶大空は風さえてふるす恋しき鶯のこゑ  
子日するけふ春日野に雪降は松に花さく心ちこそすれ
- 三 霜かれし野へのけしきも春くれはみとりに移る雪の下草
- 四 梅かえはまた春たゝ雪の中に匂ひはかりは風にしられて
- 五 昔よりいひしはこれか夕霞かすめる空のおほなる月
- 六 なかむれは雲路につく霞かな雪けの空のはるの曙
- 七 うすくこきそのゝこてふはしたはれてかすめる空に飛まかふ  
哉 2オ

- 八 なにとなく物あはれなる二月の雨そほふれる夕ぐれの空
- 九 秋のみとたれおもひけん春かすみ霞るそらのくれかゝるほと  
さらに又都の花を見にそ行しかの山ちに立もはなれて
- 一〇 花か雪かとへとしら玉いはねふみ夕るる雲に帰る山人  
桜さく春の山辺にこのころはそこも見えぬ花の下ふし
- 一一 春雨に軒のかげろふみえわかすくれゆくそらのことゝしさに  
吹まよふ吉野の奥の春風は匂ひをそふる雪け也けり
- 一二 春のあした花ちる里をきてみれば風に波よる庭の淡雪
- 一三 かせは吹としつかに匂へをとめ子か袖ふる山にはなのちる比
- 一六 桜はなちりのまかひに日はくれていつちも遠し志賀の山越

ちる花を吹くるまゝに此春は風そ嬉しきみよしの里

一七 芳野山木すゑさひしく成ぬとも猶やすらはんはなのあたりは 2ウ

一八 こやの里のあやめにまじる杜若花ゆへ人にしられぬるかな

一九 すきかてにゐてのわたりを見渡はいはぬ色なる花の夕はへ

二〇 明ほのを何あはれともおもひけん春暮る日のにしの山かけ

夏 十五首

- 二一 夏くれは心さへにやかはるらんはなにうらみしかせもまたれて  
花に馴し袂そけふはおしまるゝ匂ひをとめし名残と思へは
- 二二 くるかたへ春のかへらはこの比やあつまに花のさかりなるらん
- 二三 夜もすからやとの木すゑに郭公またしき程の声を待らん 試イ
- 二四 卯の花のかけなかりせはほとゝきす空にやけふのはつ音聞まし  
あやめ草枕にゆへは今宵こそ我のみ旅の心ちのみして
- 二五 つくはねの夏の木陰にやすらへは匂ひし花の名残ともなし  
後拾
- 二六 夏の夜の夢路にきなく子規さめても声はなを残りつゝ 3オ
- 二七 時鳥空かきくもる夏の雨におもはせかほの夜半の一声  
よひイ
- 二八 夏の月秋にかはらすめる夜はかけさへ涼しきみの羽衣  
夏のよの夢ちにきなく郭公さめても声は猶残りつゝ
- 二九 軒ちかくしはしかたらへ時鳥雲よく夜ゐるのむら雨の空
- 三〇 五月雨は猶はれやられて郭公ほのかに名のる明かたの声
- 三一 うたゝねの夢路のすゑは夏のあした残るともなきかやり火の跡  
無イ
- 三二 むら雲はたゝなるかみの声ながら夕日にまかふさゝかにの糸  
空イ
- 三三 夏草の草の葉かくれゆく螢さはへの水に秋もとをらす  
のイ
- 三四 何となく過行なつもおしき哉花おちはてゝ花ふらね共  
を音聲し春ならぬ共イ

秋 二十首 3ウ

三五 みそきする河瀬に風のすゝしきは今夜をこめて秋や立らん

三六 いつしかと萩のうは葉に音添<sup>信イ</sup>て袖にしらるゝ秋の初風

三七 竹の葉を吹うらかへすあき風そ露の玉ちる夕くれの空

三八 萩原や暁のへの露しけみわくるたもとにしらぬ花すり

三九 うす雲のたゞよふ空の月影はさやけきよりも哀也けり

四〇 あさくらや木丸<sup>と</sup>のにすむ月の光もななる心地こそすれ

四一 まはらなる榎のいた屋に影もりて手にとる計すめる夜の月

四二 大かたの秋のなさけの萩の葉にいかにせよとてかせなひくらん

四三 うす霧にあかしのうらははれやられてさたかにみえず沖の釣舟

四四 くまなしや朝ゆふ霧にはれす共かつらの里のあきの月影

秋の月霧のまかきにすみ馴てかけなつかしき山への里

四五 難波かたさやけき秋の月をみて春のけしきを忘れにける

四六 立花のこしまかさきの月影をなかめやわたすうち<sup>4オ</sup>の橋守

四七 月影を浪路はるかになむれはあまのときまは山のほまなし

四八 夕暮はさひしき物かよもすから月をなかつてうねねなんほと

四九 すまの海のあまのいさり火はのかにて猶晨明のひかりをそ待

五〇 山おろしにみきりの浪はあらくともなを霧ふかし道の川風

五一 明くれの空もたとらぬはつ雁は春の雲路やわすれさるらん

五二 きりくすうらむる声も庭の萩のすあこすかせも秋ふけにけり

五三 むしのねはほのくよはる秋のよの月はあさちか露にやとりて

五四 さは姫のそめしみとりやふかゝらんときはのもりは猶もみちせ

冬 十五首

五五 身にしみてもあはれるためし哉村雲まよふ秋すくるくれ<sup>比イ</sup>

4ウ

行秋をおしむ心しふかけれはけふもかへらし冬のたもとに

五六 秋くるゝかねのひゞきはすかはらやふしみの里のふゆのあけは

の

白菊のきのふは露とみし程にむすはゝれたるけさの初霜

五七 立田山紅葉の雨のふるまゝに嵐のをとの松にのみして

(神無月しくるゝ  
のみか我宿の  
ならのうはゝに  
風かはる也

(上ノ書入ハ原本デハ前歌ノ天ノ余白ニアリ)

五八 ちりはつるたつたの山の紅葉はを梢にかへす木からしの風

五九 冬くれはみ山のあらし音さえてむすはゝれゆく谷川の水

六〇 竹の葉はおほる月夜に影さえてむらゝ残る庭のおも哉

霜枯の籬のきくに雪ふれは猶はつ花のこゝちこそすれ

六一 さらに又うすき衣に月さえて冬をやこふるをのゝすみやき

六二 雪積る有明の月は月さえて籬の竹のうらみとりなる

六三 冬さむみひらの高ねの月さえてさゝ浪こほる志賀のから崎

六四 おもふにもあはれるへきとたち哉かた野の原のゆきくれの

空<sup>5オ</sup>

六五 ふゆのあした三輪の杉むらうつもれて雪のこすゑやしるし成ら

ん

六六 なかむれは春ならねともかすみけり雪露降る遠きののさと

六七 このころのときはの山はかひもなし枝にも葉にも雪しつもりて

六八 しほかまやさむけかるらん冬のよのふけるのうらに千とりなく

也

六九 ふりつもる雪は朝日にむら消て空にしられぬ軒の雨哉

七〇 けふまては雪ふるとしの空ながら夕暮かたはうちかすみつゝ

### 恋 十首

七一 我恋はしのたののしものへとも袖のしづくにあらはれにけり

七二 月夜にはこぬ人まつといとへともくもるさへこそねられさりけ

れ

七三 おもひ侘ねられぬものをなにと又松ふくかせのおとろかすら

ん」5ウ

七四 此くれとたのめし人はまてとこすはつかの月のさしのはる迄

七五 白菊に人の心そしられけるうつろひにけり霜もをきあへす

七六 いにしへに立かへりける心さへ思ひしらるゝまつよひのそら

七七 身をつめていとしし人を哀なるいこまの山の雪をみるにも

七八 さりとともまちし月日も徒にたのめしほともほとすきにけり

七九 住よしのきしにおふなりたつねみんつれなき人は恋忘草

八〇 待かぬ夜のねさめの床にさへ猶うらめしきかせの音哉

### 羈旅 五首

八一 たれまでもたひのね覚はあはれ也しつかおかみもこゝろゝに

八二 岩田川谷の雲まにむらきえてとゝむる駒のこゑもほのかに」6オ

八三 はるゝとさかしきみねを分すきて音なし河をけふみつる哉

八四 なにとなく名こそはおしきなきの葉やかさしていつる明方の空

八五 ひくまつはまた霧ふかくも立にけり明ゆく鐘は難波わたりに

### 山家 五首

八六 山さとの柴の編戸にかけもりてほのかにかすむ春の夜の月

八七 霜ふかしそこともしらぬ山寺にはるかにひゞくれの音哉

八八 秋の月霧のまかきにすみなれて影はつかしき山辺の里

八九 物ことにさひしき宿のすき哉まかきになるゝ嶺の白雲

九〇 なくさめにけふりはかりはたえねともさひしき物を冬のすみか

は

### 鳥 五首」6ウ

九一 春くれはみとりの空になくたつのなかのうらに友さそふ也

九二 しろさきひとりねしのこゑす也ゆるきのもりの暮かたの空

九三 結びをきしひはりの床の草かれてあらはれわたるむさしのゝ原

九四 か。をいたみこしまかさきにすむをしはみえても見えず浪のな

みまに

九五 白山の松の木陰にかくろへてやすらにすめるらいの鳥哉

### 祝 五首

九六 万代の末もはるかにみゆるかな御もすそ川の春の明はの

九七 石清水たえぬなかれの夏の月杜のこけもむかしおほえて

九八 みかさ山みねの小松にしろきかな千年の秋の末ははるかに

九九 冬くれはよもの木すゑはさひしきに千世をあらはす住吉の松」7オ

一〇〇 千早振日よしの影も長閑にて浪おさまれる四方の海哉

### (一行分空白)

正治貳年第二度百首 月日未勘

### 霞

一〇一 春のくる空のけしきはうす霞たなひき渡るあふ坂のやま

一〇二 深山辺のまつ雪まにみ渡せば都は春のかすみなりけり

一〇三 大方はかすみもやらぬ明ほのにはるをむかふる塩かまの浦  
一〇四 海のうへはかすみにくもる春の月に心はかりはすまの明ほの  
一〇五 梅かゝはななむる袖に匂ひきてたえ／＼かすむ春の夜の月  
鶯 一ウ

一〇六 かねの音にこその日かすはつきはてゝ春あくる空に鶯のこゑ  
一〇七 春きぬと誰かはつけし春日山きえあへぬ雪に鶯の声  
一〇八 谷にのこるこそ雪けのふり出て声よりかすむ春の鶯  
一〇九 梅かえの梢をこむる霞よりこはれてにはふ鶯の声  
一一〇 鶯のはつねをもらせ春やとき花やをそきとおもひさためん

花

一一一 さきにけりかせのこぬまにけふ桜心のほとそたをりつゝみん  
一一二 いかにして春さく花をしはしたに風にちらさてみよしの山  
一一三 桜さくひらの高ねのはるかせは木のしたのみの雪け也けり  
一一四 花にくもる月みよとてや御芳野の梢をはらふ春の山かせ」  
8オ

郭公

新十

一一五 いそまつたひきえすなかるゝ雪なれや花散かゝる春の山水  
一一六 時鳥しのひもあへすもらす也さ月まつまのこそそのふる声  
一一七 子規一こゑ聞は夢のよの名残の空にありあけの月  
一一八 名のる也雲みはるかにほとゝきすあさくら山のたそかれの空  
一一九 郭公またよひなからあくる夜の雲のいつくに鳴わたるらん  
一二〇 やとりせし花たちはなはそれなからまれに成ゆく時鳥哉

五月雨

一二一 音羽川せき入水にみゆる哉浪さへくもるさみたれの空

一二二 この比のみのつわたりは軒にふくあやめにちかき五月雨のなみ」8ウ

一二三 あま人は袖ともわかすしほるらんをしまか磯の五月雨の比  
一二四 五月雨はこやのしのやにあらす共これもほしあへすさゝかにの糸

一二五 水まさる八十宇治河の五月雨に木すゑをかよふまきの島人

草花

一二六 うちなひきさやかにみえぬ秋なれと萩ふく風をかたへすゝしき  
一二七 かせになひくかたをか山の女郎花たれよもきふに思ひたつら

一二八 秋かせの吹にし日よりしのすゝき忍びもあへすはにいてにけり  
一二九 あきはまた鹿のねさそふしるへせよこ萩か原をわたる夕かせ  
一三〇 大かたは玉にまかひし白露もはきにしたかふ秋の夕暮」9オ

月

一三一 いかにいひいかにかすへき山のはにいさよふ月のたくれの空

一三二 なかむれは木の間もりくる秋の月。かせにさかなき森の下影

一三三 有明の月には遠き名のみしてすむかひなしやにしの山本

一三四 いまは秋山ある里にすまひせし月みる空に有明もなし

一三五 はゝそはら木末をもゝに染かへて残るくまなき森の月かけ

紅葉

一三六 大井川あらしの山のかけみえてそこの木すゑにもみちしてけり

一三七 うすもみちちすかせにもつれなけれ時雨にそまぬ色もかひ

あらは

一三八 秋の時雨ときはの山をそめかねて嵐にそかるよその紅葉を  
一三九 あきふかし染ぬ梢はあらし山しくれにもるゝあをき一えた」

一四〇 竜田山をむる時雨のあやめまで秋もみちもふかき比哉

9ウ

雪

一四一 をかや原うらかれにけり冬のゆきふるからをのゝ明ほのゝ空

一四二 此比は花も紅葉も枝になしはしなきえそ松のしら雪

一四三 冬の夜のしのゝめの空は明やうてをのれそ白き山のはの雪

一四四 あやにくに時雨にたへし松の葉の心よはきは雪の下おれ

一四五 さひしさに煙たえせぬしつの庵をとへかし人の雪の夕くれ

氷

一四六 冬くれはいしまのたつき氷しておもひたえたる山川の水

一四七 霜さゆる玉もの床にこほりしてはらひもあへぬをしの声哉」

10オ

一四八 あけかたは遠のみきはに氷してかへりてちかき志賀の浦浪

一四九 うき草はなを跡とめす冬のよの谷行水はうすこほれとも

一五〇 冬の夜の河かせさむみ氷しておもひかねたる友ちとり哉

神祇

一五一 いすゝ河たのむ心しふかければあまてる神を空にしろらん

一五二 ちはやふる神や知らんもろかつら一かたならすかくるたのみ

を

一五三 玉かきや神のひかりもまさり行月やかつらの昔おもえて

一五四 跡たれし過にしかたを思ふにも頼しるしをみわの山もと

一五五 千早振庭火のまへにとる神香をかくはしめ山あゐのそて

釈教」10ウ

花叢

一五六 いつる朝日山の高根をてしせともゆくゑもしらぬ谷の埋木

阿含

一五七 しりそめしかけきかそのゝはきのはにひまなくをける此牙の

無漏

朝露

方等

一五八 さまゝにをしへし道のかひあればつまにはふかしさとりい  
てにき

般若

一五九 池きよき水にうつれる月かけや昔といへるためしなるらん

法花

一六〇 いたつらにもるゝ草木もなかりけりいちみの雨の所わかね

は」11オ

曉

一六一 はつせ山あけぬとつくるかねの音に声うちそふる嶺の松かせ

一六二 秋の月ひかりそまさる玉くしけふたみのうらの明かたの空

一六三 くもりこしひはらの下の月影も残るくまなし有明の空

一六四 秋の夜の月のかけさすまきの戸ををしあけかたの横雲の空

一六五 雲もなしなめはにしにめぐりきて山のはちかき有明の月

暮

一六六 三日月のほのめくくれの山のはゝなめはかりも有明の空

一六七 大井河あせきに秋の色みえていさよふ浪のゆふくれの声

一六八 山おろしに梢の木のはつきはてゝ色なき枝の夕時雨哉」11ウ

一六九 ふる雪をたそかれ時の空めには花とや人のみよし野の里  
一七〇 山のはをめぐる時雨の雲間より取あへす出るゆふ月夜哉

山路

一七一 春ゆけは霞のうへにかすみして月にはつらしをのゝ山みち  
一七二 葉をしけみもる隙もなし秋のよの月おほる成足柄の山  
一七三 秋の月くまなき比はとまりせしひるにやかはるさやの中山  
一七四 なかめこし心は秋の閑なれや月影きよきふわの中山  
一七五 立田山もみちし秋はうつもれて木の葉にまよふ岩のかけ道

海辺

一七六 なかむれはあはちのせとの夕霧にむらきえわたるあまの釣  
舟<sup>12オ</sup>  
一七七 月きよきあかしのせとの浪のうへにうらみを残す有明の空  
一七八 あまをふねゆくあもしらぬ浪の上につくの浦へさしてゆく  
らん  
一七九 磯の松あらしにたえぬおりしもあれ哀うちそふ浪のをと哉  
一八〇 あかしがたうらふくかせに雲消て浪よりにしにあり明の空<sup>3月</sup>

禁中

一八一 はるはたゝ軒はの花をなかめつゝいつらわするゝ雲のうへ哉  
一八二 うすみとりまた夏あさき木間より春をとゝむる藤つほの藤  
一八三 九重にはきのさかりはみかは水岩間の浪も花さきにけり  
一八四 夜もすから雲井の庭をてらすなる多しのたく火は有明のころ  
一八五 くまなき雲井の月にやすらへはうしみつまで夜も成にけり<sup>12ウ</sup>

遊宴

一八六 千世の春たにの戸いつる鶯のはつねにそ引二葉なるまつ  
一八七 結びあくる宿の泉の水さえて夏も夏なき物にそ有ける  
一八八 秋の夜の月にてうたふ舟のうち浪のうへなるうからめのこゑ  
一八九 雪ふかきあはつの原のくれかたはあはするたかも手に帰る也<sup>りけりイ</sup>  
一九〇 敷島ややまとことの葉かちまけに人の心そ人にたえぬる<sup>こ</sup>

公事

一九一 雲のうへにこれや春たつ験しなる袖をつらぬるけふの諸人  
一九二 逢坂の山たち出て雲のうへに影さしのはる望月の駒  
一九三 あまつ風雲ゐの空をふくからに乙女の袖にやとる月影<sup>13オ</sup>  
一九四 もろ人のみたらし川にするか舞雲ゐにかへるあか月の声  
一九五 年のくれ三世の仏の御名を聞て心はれ行雲のかよひち

祝言

一九六 三笠山いつる朝日のひかりよりのとかなるへき万代のはる  
一九七 春くれはひとしほまさる住よしの松やちとせのためし成らん  
一九八 千早振神を知らんふしておもふおきてかそふる万代のおく<sup>新後撰</sup>  
一九九 亀のおのいはねをおつる白玉の数かきりなき千世の行末  
二〇〇 むしろたやかかねてちとせのしるき哉いつぬき川に露遊ふ也<sup>露遊</sup>

(一行分空白)

建仁元年三月内宮御百首<sup>13ウ</sup>

春 二十首

二〇一 朝日さすみもすそ河の春の空のとかなるへき世のけしき哉<sup>風</sup>  
二〇二 見わたせは今朝はかすみの志賀のうら舟をむる春の初かせ<sup>本ノ</sup>  
二〇三 立田川柳か枝の春かせに水きえてはさゝ浪そたつ  
二〇四 御芳野のこそ山かせ猶さえて霞はかりの春の明はの  
二〇五 鶯のはねしろたへのあは雪をきえねと春のかせはふきつゝ



二〇六 淡雪のいまたふるのゝ下わらひをのれも出て春はしるらん

二〇七 難波津にさくやこの花朝霞春たつ波にかはる春かせ

二〇八 やまかつのかきほの草のうすみとりやかてもなるゝ春の露かな

二〇九 朝霞もろこしかけてたちぬらしまつらかおきの春の明ほの

14才

二一〇 かへるかり都の雲をはるかけてなれこし空のかたみともみよ  
二一一 梅かゝをまやのあまりにさそひきてありとや袖に春かせそふ

く

二一二 桜はなそれともえこそしら雲のなへてかゝれるやまの夕暮

二一三 帰るかりたひの空にもわするなるよし野の花にかすむよの月

二一四 いかにせん花に山風吹ぬ物おもへとのみよし野の春

二一五 花の色は昔なからに匂へともたれかはとはんしかの春かせ

二一六 まよふとも今はいとほし春の風花より後のみねの白雲

二一七 待わひぬまれにもとひこ都人やよひの月のあり明の比

二一八 いかにせんよにふるなかも紫の戸にうつるふはなの春の暮か

た

二一九 春の名残よし野ゝおくにたつぬれは花の青葉に山かせそふ

く 14ウ

二二〇 あつまちのさのゝふな橋あすよりやくれぬる春を恋わたるへ  
き

### 夏 十五首

二二一 なにとなくすきこしかたの恋しきに心ともなふをそ桜哉

二二二 時鳥さて山鳥のしたりおのなか／＼つらきさ夜の一こゑ

二二三 子規まつよひなから明にけりさもあらぬ鳥の音のみきこえて

二二四 泪にはこれをからなん時鳥はなたちはなのむら雨の露

二二五 むすふての露に月すむ山の井のあかてもあくる夏の空哉

二二六 里人のおりはへはせる夏衣なぬかもすきぬさみたれの比

二二七 まはらなるあまのときまの五月雨にかつかぬ袖をほしそわつ  
らふ

二二八 郭公月見よとてのしるへ哉なきつるかたのありあけの空

15才

二二九 しはたれぬにはの水海あまの袖ほしえぬものを五月雨の比

二三〇 すきぬなる夜半のね覚の郭公声をはしはし月にのこして

二三一 日にみかく玉かとそみる夕たちのはれ行跡の野への白露

二三二 みたれあしの下葉すゝしく露はあて沢辺の水にかよふ秋かせ

二三三 なかむれは秋ちかしとの験しかな鳥羽たの露にはたるとふ也

二三四 故郷の庭のさゆりの花にをく露に秋なるかせわたる也

二三五 夏と秋とゆきかふ空やふけぬらんやゝ露おもる夜はの袖哉

### 秋廿首

二三六 袖のうへに秋しれとてのひかりかな木のまの月のぬるゝかは  
なる

二三七 いかにしていくかもあらぬ秋かせの身にしむ色をふかくそむ  
らん 15ウ

く 15ウ

二三八 山ひめの衣秋かせふくからに色こと／＼にのへそなりゆく

二三九 露しけき鳥羽田の面の秋かせに玉ゆらやとるよひの稻妻

二四〇 とこ世より山とひこえてくる雁の翅にのこる故郷の雲

二四一 秋をへて物おもふ事はなけれども月にいくたひ袖ぬらすらん

二四二 夜もすからあきの有明を水無瀬川結はぬ袖に宿る月哉

二四三 さをしかの入野の野へのはつ尾花たれ手枕にむすひそめけん

新後撰

二四四 思ふ事わか身にありや空の月かたしく袖にをける白露

二四五 いかならんとときかわすれん宮木のゝ萩の上葉の露の月影

二四六 一夜ぬる野へのしのやのさゝまくらかことかましき袖の露哉

二四七 たかむかしすみこし里の秋風や猶ふか草の野へに吹らん

二四八 をしか鳴秋の山田のかりよりにいなはの風 本ノマ、

二四九 来てみればあかしの浦の夜半の秋おもひしよりも澄る月哉

二五〇 うきねするねさめの秋をなむれば昔の月に松かせそ吹

二五一 秋の雲千さとをかけて消ぬらん行事をそき夜はの月哉

二五二 白露のをくでのいなはかりそめにやとるともなき夕月よ哉

二五三 春の夜のおほろ月夜の面影をしはしみせる夕霧のやと

二五四 あきふかしたれあさちふにひとりかも夜さむの衣月にうつら

二五五 もみち葉をぬさにたむけんゆく秋の空の名残ををしもなく也

冬 十五番 首

二五六 我袖にいくたび月のやとるらんくもれははるゝ初時雨かな

二五七 やとりこし露の行ゑをとひかねて霜になれぬるむさしのゝ月

二五八 冬のきていくかもあらぬをなむれば空さえわたる霜のうへ

二五九 ねさめとふかけひの水も峯の松も雪に音せぬみねの松かせ 本ノ

二六〇 かりにこしうつらの床もあればゝ冬ふか草の野へそさひし

二六一 立田山木のは吹はらふ木からしにひとりつれなき峯の松哉

二六二 すかはらやふしみの空にかせえて雪けになりぬをはつせの

山

二六三 さひしさも世のうきよりはいかゝせんみやまのおくのしは、 本ノマ、

二六四 霜むすふ庭のかるかやはのゝとまかきのくれにのこる秋 落ル本ノ、

二六五 山かせのふしみのすそにたちす雪 本ノ、それそまことに空にしられ

二六六 しほかせの吹あけの浦のとも千鳥いく夜さえたる月をみるら

二六七 月ならぬ雪も有明の冬のそらくもらはくもれさらしなの里

二六八 舟かよふやそうち川のかはる瀬にたれかこしまの雪の夕くれ

二六九 けぬるうへにふりしけみ雪あすよりの春かせふかはまれにこ

二七〇 おしみこし花やもみちの名残さへさらにおほゆる年の暮哉 風雅

二七一 くもちかく飛かふたつのことゑまでものとけき空の験しとそ思

二七二 万代は浪こそかけてかそふらめはまへの松のゆくすえの陰

二七三 かせ吹はおはなかたよるくれ竹のしけきよことに千世そこも

二七四 我宿に千とせをかけてすむ月の光をちぎれ庭の松陰

二七五 四方のうみの浪につりするあま人もおさまれる代の風はうれ

二七六 つきもせず都の空に吹かよへ神路の山の千世のはつかせ

二七七 神風やいせの浜辺のあけはのに霞ふきよる浦の初風

二七八 神かせや空なる雲をはらふらん一夜も月のくもるよそなき

二七九 秋の空のとけき浪に月冴て神かせさむしいせの浜萩

二八〇 みもすそやたのみをかくる神風の心にふかぬ時のまそなき

### 雑二十首

二八一 引てうへし人の行急はしらね共木たかきまつのかせの音かな

二八二 秋草のかりねのまぐらいくよへぬ下はの露に袖ぬらすとて

二八三 草枕都の秋をさそひきて月におほゆるふるさとの空」<sup>18ア</sup>

二八四 こよひたれ松と波とに夢さめて吹上の月に袖ぬらすらん

二八五 忘るなよ露にしほるゝたひ衣きつゝもなれぬあつまちの月

二八六 清見かた晨明の月の影さえてせきちの鳥もこゑさがる也

二八七 旅の空おなし雲路を通ひきて月をともしな故郷のかせ

二八八 哀なるあまの磯屋もいかゝせんさえて世にふる方しなけれは

二八九 すまのうらふるきせきやを月そもるかよふ衛はきく人もなし

二九〇 故郷をたゝ松かせそひとりふく月はみるやとふ人はなし

二九一 やまふかみ柴のかりいほね寛をも月はさすかにとはすやはある

る

二九二 住の江の松のしつえに浪かけて梢に残るおきつしは風

二九三 みなれさほさしてそれとはなけれとも過にしはかり恋しきは

なし」<sup>18ブ</sup>

二九四 月のすむをしまの松の風の音はなれたるあまも如何にしのお

や

二九五 人しけき都の空におもふかないかにみ山の月はさひしき

二九六 事そともなきたにぬるゝたもとより恋や恨のなかめを所思

二九七 我のみとむすふ深山の柴の庵に月はもとよりすみなれにけり

二九八 大空をその事となく詠れはあきなる風そそらにふきける

二九九 松にふくみやまのかせのはけしきもおほえぬまてに住なれに

けり

三〇〇 おもふへしくたりはてたる世なれとも神のちかひそ猶もくち

せぬ

### (一行分空白)

### 外宮御百首

### 春 二十首」<sup>19オ</sup>

三〇一 宮河のはるたつ空のはつかせにうち出る浪の花やちるらん

三〇二 たにかせのうくひすさをふたよりを<sup>にか</sup>や山里人も春を知らん

三〇三 はるの来てなをふる雪はきえもあへす杉のは白き三木の曙

三〇四 み山にはまた雪ふかき松のかせすそ野に春の水とく也

三〇五 かすめともよしのゝ雪の猶さえて松の葉しろき古郷の春

三〇六 からさきや春のさゝ浪なをさえてかすみに成ぬにほの水うみ

三〇七 あさかすみ春のしきつのうらかせにみとりにかよふおきの浪

哉

三〇八 にはの海やかすみの空にこく舟の浪にきえゆくしかの曙

三〇九 物思はゝたへてもいかゝなかもましふけ行月の春のけしきを

三一〇 春霞立出てみよ芳野山今いくかりてさくら咲けん」<sup>19ウ</sup>

三一一 かすか山木末はかすむ峯のまつもとの岩ねに春雨を降<sup>本ノマ、</sup>

三一二 時しあればかへるならひのはるのかり涙そ花の枝に

三二三 桜花いまか咲らん足曳の山下風のにはふあけほの

三二四 かすみたちこのめはるさめ古里の芳野の花もいまや咲らん

三二五 かきりなきあはれは春とみゆる哉よもの山辺の夕暮の空

三二六 かすみしくとこよの鳥を詠れはくれゆく山にきゆるかりかね

三二七 かへる雁の夜の涙のをきつらん桜露けき春の明はの

三二八 野も山もおさまれる世の春風は花ちるころもいとひやはする

三二九 御芳野の春はやよひに暮にけり桜になりぬ四方の山かせ  
三三〇 さは姫もくれゆく春をおしむらんわきてかすめる恋の空哉よひ歌

夏十五首

20才

三三一 さてみればなにはの夏の朝ほらけ春こしかたへかへるうらかせ  
せ

三三二 なれくし春の祝の花の香もとをさかりゆくなつの比哉  
三三三 みしま江のひしのうき葉にゐる玉をみかくか夏の月もさやけき

三四 をつからならのかけもる夏の月いかて下葉の露にすむらん  
三三五 ぬれつゝや独ゆくらん郭公とはたのをのゝ雨のゆふくれ

三三六 なつの夜のふかき梢のかせふけは曇ぬ月にむら雨そふる  
三三七 故郷の立花そく庭の雨の鳴郭公むかしこふらし

三三八 夏の空きよ滝河のいかたしやいく夜も月にすゝみきぬらん  
三三九 郭公なきつるかたの山のはになこりかほなる夜はの松かせ

20才

三三〇 ほととぎす月に契や有明の山よりいつる声のさやけき

三三一 時鳥こゑやむかしの磯のかみふるき都のむらさめのそら

三三二 蓮葉にはにこらぬ露の玉こえてすゝしくなりぬみな月のかけ

三三三 さゝかにの糸に玉ぬく夕暮はしかこそなかね秋を来にける

三四 螢とふもりの下草秋かけてまたき色つくみな月の空

三五 六月やたけうちそよくうたゝねのさむる枕にあきかせそ吹

秋 二十首

三三六 袖の上に露たゝならぬゆふへ哉おもひし事よ秋の初かせ

三三七 あはれをは萩の上葉になしはてゝしらすかはなる秋の初風  
三三八 ときは山やまたちならすしかの音をとふらふみねの松の風

哉 21才

三三九 さをしかのいる野のすゝき方よりにかせにみたるゝ虫のこゑ

続古 哉

三四〇 袖の露をいかにかこたん事とへとこたへぬ空のあきの夕暮

三四一 我袖にあきなればとてをく露をこと有かほに宿る月哉

三四二 山里は月みよとてやをのつから空行雲をはらふ秋かせ

三四三 しのにをく露にふか草のあき風に鶉なくなる野への夕暮

三四四 今はたゝおもひもいれて月はみんな我やとからのあきのかせか

は

三四五 しかのねも聞ぬね覚のかせたにも深山の月はさそなきひしき

三四六 かり人も哀しれかし秋かせに妻こふ鹿のゆふくれのこゑ

三四七 秋ふかきみかきか原の夕霧につまとふしかの夕くれのこゑ

三四八 あきの田のかり。庵に露をきて隙もあらはに月をもちくる

21才

三四九 草枕夜半の哀はおほえ山いくのゝ月にさをしかの声

三五〇 すみわひぬ事とひこなん都人は山の庵の秋のくれかた

三五一 たかまとの尾上のみやはあれぬともししてやひとり松虫の声

三五二 すかはらや伏見のあきのくれかたにあれまくおしむきりくすかな

三五三 長月の有明かたの月影に秋をやかこつさをしかの声

三四 野への色はおもひしよりはうらかれて霜をうらむる蜚かな

三五五 秋ふかき有明かたのよものあらしみ山の月と木のはふく也

冬 十五首

三五六 さをしかのをのゝ草ふしあれぬらん秋はいくたのふゆの曙

三五七 冬のきて紅葉ふきおろす三笠山嵐の末にあきそ残れる」<sup>22</sup>オ

三五八 霜ふかき夜半のあらしやこほるらんむすほゝれゆく峯の松風

三五九 みよしのゝしくれも日教故郷にかよふあらしや雪けなるらん

三六〇 冬さむみ岩まの浪は氷して清滝川に月そのこれる

三六一 足曳の山にしろきはかきくもり昨日の空に降し雪かも

三六二 天川河瀬にやとをかり衣かたのゝ冬の雪のゆふくれ

三六三 故郷は軒のいたまに月もりて嵐にのこる冬の夜の夢

三六四 雪しろくかひのしらねのさゝのいはやとれる袖に宿る月影

三六五 冬さむみあさあけの袖の氷る哉軒はの松の雪の下風

三六六 とりかへる谷のとほそに雪ふかしつまきこるおのみちやたえ

なん

三六七 有明の月さへあまりさゆる哉庭の浅茅の雪の下風」<sup>22</sup>ウ

三六八 ひしの山たかねの雪のけぬかうへに又ふるものはあられ也け

り

三六九 絶／＼に残れる峰の椎柴にふけゆく冬の日数をそみる

三七〇 松かせに又こんころをたのめてやふゆもいなはの山のしら雪

祝五首

三七一 関守も関の戸うとくなりにけり治れる世に逢坂の山

三七二 和歌のうらのあらはに塩や満ぬらん千代をこめたるたつのも

ろ声

三七三 かせふけはなひきおれふすなよ竹の末はの露もいく千代の数

三七四 波かくるいその岩ねの松か枝のかはらぬ色にうら風をふく

三七五 しほの山さし出の磯のしきなみに千とせをいのるとも衝哉

神祇五首」<sup>23</sup>オ

三七六 春の色をけふ宮川の杉の葉に吹くるかせも神さひにけり

三七七 宮河やいつもみとりの榎の葉に今一入のはるかせそふく

三七八 久方の空ゆくかせに雲きて月影さむし宮河の秋

三七九 すゝか山いせのうらはの秋の浪やとれる月をよする春風

三八〇 よゝへてもかみやみ川にたえぬ浪たえてわするゝまなく時な

し

雑二十首

三八一 昔には神もほとけもかはらぬをくたれる世とはひとの心そ

三八二 都人たのめぬやとの榎の戸になにのならひの庭の松かせ

三八三 なかめつる明石の月のなこり哉鳥かくれ行冬の明ほの

三八四 月をのみみ山のおくにむすふいほもとよりたてる庭のまつ

哉」<sup>23</sup>ウ

三八五 草枕床にね覚をすかのねのなか／＼しよを月そとひける

三八六 なかめわひぬかくてふるひを又もありやみるらんものを空に

すむ月

三八七 はつせ山あかつき方のかねの音にうちおとろきて月をみる哉

三八八 山さとのね覚もよはす松かせもすみなれぬまそ夢<sup>も</sup>のこりし

三八九 たれみよと人も昔せぬ奥山のまきのはわけに独りすむ月

三九〇 おなし露の袖や草はにをきわけてほすましもなき旅衣哉

三九一 しほたるゝすまのうらはゝよる浪のいく夜の月をやとしきぬ

らん

三九二 つたしけるうつ山辺の山かせにたひねの夢を結び侘つゝ

三九三 よそにみしたかねの雲にこよひかも衣かたしきあかしつる哉

三九四 今宵たれあかしのせとにうきねして浦はの月にそてぬらすら

ん」<sup>42</sup>オ

三九五 何となくすぎこしかたのなめまて心にうかふゆふくれの空  
三九六 唐衣袖しくうらのとまやかたならぬいその松のかせかな  
三九七 故郷にまでとつけこせうつの山みやこへかよふ晨明のつき  
三九八 草枕たひねの夢の関守は野にも山にも松にふくかせ  
三九九 かりにてもおもひをこせよ宮こ人おなし心に月はみすとも  
四〇〇 わかのうらのあしまの浪にたちかへり昔にゝたるたつの声哉  
(二分空白)

同六月千五百番御歌合

春二十首

四〇一 春たてはかはらぬ空そかはり行昨日の雲のけふのかすみか」

24ウ

四〇二 冬と春とゆきあふ坂の松かえに霞をしき淡雪の降

四〇三 葛城や高まの山に雪消てさえし嵐は春の初風

四〇四 白妙の衣春雨かきくもりふる野の若葉今やつむらん

四〇五 たをりけん軒はの梅をたつぬれははなもえならぬ袖の香をす  
る

四〇六 春風のさそふる野への梅かえになきてうつろふ鶯のこゑ

四〇七 池水のみくさにをけるよるの霜きえあへぬうへに春雨を降

四〇八 ふかき夜の哀はしるや春の月しく物もなき有明の空

四〇九 宵のまはほのめく月のしかすかに霞も果ぬ春の天空

四一〇 月よゝし夜よしと誰につけやらん花あたらしき春の故郷

四一一 みよしのゝ吉野の山のはなさかり雲より下にはるの白雲」25オ

四一二 雁かへる峯のかすみのはれすのみ恨つきせぬ春の夜の月

四一三 かへるかりかすみのうちに声はして物うらめしの春のけしき  
や

四一四 よし野山雲にうつろふ花の色をみとりの空に春風そ吹  
四一五 ちらはちれよしや芳野の山桜吹まよふかせはいふかひもなし  
四一六 花は雪とふるの小山田返しても恨果ぬるはるの夕かせ  
四一七 かすみゆく三月の空の山のはをほの／＼をくるいさよひの月  
四一八 よの中に絶てあらしのなかりせは花に心はのとけからまし  
四一九 かせふけは花の白雲やゝ消て夜な／＼はるゝみよしのゝ月  
四二〇 いにしへの春さへけふはつらき哉ふるといいかゝ帰りそめけ  
ん

夏十五首」25ウ

(実数八十四首)

四二一 はる山の霞の衣ぬきすてゝけさはみとりのなつの明はの

四二二 夏の空曇れる夜はの卯花の月をやとせる玉川の里

四二三 郭公なかすはたゝにふけならん夢のたゝちもまち心みん

四二四 またよひの月まつとても明にけりみしかき夢の結ふともなく

四二五 夕月夜しはしやとれる山の井のあかぬ光の袖にすゝしき

四二六 心あてにきかはやきかん郭公雲路にまかふ峯の一声

四二七 おもひ入てなかわる空のむら雨にあまり程なき時鳥哉

四二八 戔士のやみをわかぬみなれ棹流石に夏は月をまつ也

四二九 ともしするかけをよな／＼深山木のこりすもしかのめをあは  
すらし

四三〇 かせをいたみはすのうは葉にやとしめてすゝしき玉にかはつ  
なく也」26オ

四三一 沢水の草葉にやとをかりこものおもひみたれて行螢哉

四三二 柳かけすゝみにきたるから衣ならす秋になるゝ川かせ

四三三 夏深み草の葉かくれ露はあてしのひ／＼の秋のはつかせ

四三四 みそき河瀬々の玉ものみかくれてしられぬ秋や今夜きぬらん

秋 二十首

- 四三五 かせの音に秋はけふより立田山よはにや夏の独こゆらん  
 四三六 秋たちて昨日にかはる波かせにすゝしくなひくいせのはま荻  
 四三七 しらすきまたほに出ぬ夕つくよ流石に秋のけしき成共なれ共  
 四三八 七夕のくものたもとやぬれぬらんあけぬとつくる秋かせの声  
 四三九 日かけさすをかへの松の秋かせに夕くれかけて鹿を鳴なる」  
 四四〇 このゆふへかせ吹たちぬ白露のあらそふ萩をあすやかもみん 26ウ  
 四四一 女郎花枝もとをくをく露をまちとる風にむし恨なり  
 四四二 わけゆくはしけくも露のみゆる哉月吹やとす野への秋風  
 四四三 あはれ昔いかなる野辺の草はよりかゝる秋風の吹はしめけん  
 四四四 野へにをける露をは露となかめきぬはなる玉かかりの涙か  
 四四五 ものやおもふ雲のはたての夕暮にあまつ空なる初雁の声  
 四四六 秋の田のしのをしなみ吹かせに月もてみかくつゆの白玉  
 四四七 小山田のいなはかたより月さえてはむけのかせに露みたる也  
 四四八 めくりゆく秋やはもとのあきの空月をむかしのしかのふる里  
 四四九 おなしくは哀しられん人もかなしかとむしとの秋の夕くれ」 27オ  
 四五〇 秋の虫の手たまもゆらにをるはたを誰きてみよとのへの夕く  
 れ  
 四五一 ますかゝみみるめのうらのよはの月こほりをよするのへの夕 秋の夜か  
せの夕  
 四五二 玉はこの道のしは草うちなひき古きみやこに秋かせを吹  
 四五三 秋山の松をはしのけ立田姫をむるにかひもなきみとり也  
 四五四 けふこそは秋の日数もくれは鳥あやなし名のみなな月（る）上ニカラ前書の空

冬 十五首

- 四五五 かせさえてけさより冬をなら柴のかりはのをに時雨過也  
 四五六 秋暮で露もまたひぬならのはにをして時雨のまつそゝく也  
 四五七 冬きぬとあらしに菊の露のまにぬれてほしあへす今朝そうつ  
 ろふ  
 四五八 紅葉するほとは時雨のむら雲に空行月のめくりあふらん」 27ウ  
 四五九 はれくもり時雨ふるやのいたまあらみ月をかたしく夜はのさ  
 むしろ  
 四六〇 から錦秋のかたみをたゝしとや霜まで残る庭のひとむら  
 四六一 み山ふく四方の木からしさえそめて根のは白く初雪そふる  
 四六二 里人の庵にたけるしあしはの煙吹しく山おろしのかせ  
 四六三 をしてや難波のあしの下かくれかりねもる鴨の霜になく声  
 四六四 浦ちかき末の松山雪ふれは冬よりうへを浪やこゆらん  
 四六五 雪のあした木の下風は寒けれと桜もしらぬはなそちりける  
 四六六 月かとはらはねは又白妙の袖にそさゆるふかき夜の霜  
 四六七 まきもくの岸（る）の小松に雪ふれはひはらか末に雲をかくれる  
 四六八 杉の葉のみとりもみえすふる雪をわたるあらしの跡の一し  
 ほ」 28オ  
 四六九 冬くれてことしもけふにつくはねの木のみめもかねて春めきに  
 けり  
 祝五首  
 四七〇 万代と御裳濯川の春のあした浪にかさねてたつかすみ哉  
 四七一 万代とみたらし河の夏のよに秋とすめる山のはの月  
 四七二 よろつよとみかさの山の秋風にのとかにみねの月をすみける  
 四七三 万代とみつの浜かせうらさえてのとけき浪に氷ゐにけり

四七四 よろつよとみくまのゝ浦のはまゆふのかさねてもなをつきせ  
さるへし

恋十五首

四七五 足曳の山した水のわきかへり色にはいてし木かくれてのみ

四七六 神無月袖のみしたの初しくれ人の心のあきの一しほ」<sup>28ウ</sup>

四七七 あしのやのなたの塩屋の海士人もしほるゝ袖のいとまなきま

て

四七八 いつらあきのなかきてふ夜は名のみしてつきぬ名残そ有明の

月

四七九 つれもなき人をはたのむかひなくくるゝよことに秋かせそ

吹

四八〇 なかむれはこぬ人またるわひつゝも今宵の月にあかすかもね

ん

四八一 君はしるやまつ夜あまたに積りきて袖の有明の月をみる哉

四八二 うらみぬとなれる夕へのけしき哉たのめぬ宿の萩の上風

四八三 萩の葉に身にしむ風はをとつれてこぬ人つらき夕くれの雨

四八四 うつゝこそぬる夜ゐ／＼のかたからめそをたにゆるせ夢のせ

き守

四八五 はまひさし久しくもみぬ君なれや逢夜をなみの浪まなければ

四八六 かす／＼におもふ心はおほよとの松をうらむる浪のをと哉」<sup>29オ</sup>

四八七 つれなさはたゝことうらにたて煙わかすむかたは月そさやけ

き

四八八 白露もあけ行ほとは野へにをく時ともわかぬ袖の上哉

四八九 長月の月みてかひはなけれともたのめしものは有明のころ

雑十首

四九〇 夕たすぎ万代かけて住吉の神や種まきし岸の姫松

四九一 都にもみしは月そとおもへともそゝろにぬるゝたひの袖哉

四九二 ありそ海のやむ時もなき浦風に浪かくれゆくあまのつり舟

四九三 すまのうらにまつ夜ふけゆく月影を浪のあなたに誰らん<sup>本ノマ、</sup>

四九四 宮古人とはて月日はすきの庵の軒になれたるみねの松かせ

四九五 これやさは都にてみし空の雲それをかたしく嶺のたひふし」<sup>30オ</sup>

四九六 旅ねする夜はのあらしに夢さめて打詠れはありあけの月

四九七 わするなよかゝるねさめの夜半の秋いかなる空の月をみると

も

四九八 月残るあしやの里の有明に昔ににたるあまのいさり火

四九九 誰みよとあれたる宿の松かせにひとり住けるあさちふの月

五〇〇 朝夕にあふく心を猶てらせ浪もしつかに宮川のつき

(一行分空白)

建保四年二月御百首

春

五〇一 昨日までさえし雪けの引かへてあくる霞の山そのときき

五〇二 うちいつる春やとませの波まより白ゆふはなの色そくたく

る」<sup>30オ</sup>

五〇三 時しらぬ山はふしとし聞しかと春たつ空はまつそかすめる

五〇四 いもはけふしめのゝあさちふ分てひれふる袖そ若葉をそ摘<sup>に敷</sup>

五〇五 春かせの鶯さそふたよりにや谷のこほりをまつはとくらん

五〇六 桜花えたにはちるとみるまでそかせにみたれて淡雪をふる

五〇七 鶯の飛火の野への雪のうちにそれかと計匂ふ梅か枝



五〇八 みよしのやむつたのよとの川柳みとりをくゝる春の岩波

五〇九 みとりなる野への柳の露をもみたゝぬはかりに春かせそふく

五一〇 さゝ竹の大宮人は跡ふりて霞そふかきさほの山かせ

五一一 難波女のたくやあし火のけふりさへ驢月夜の色やそふらん

五二二 たかみそき夕されくれてかけろふのものゆる春辺のみしかよの

月三〇ウ

五二三 さ保姫の霞の衣ぬきをうすみ花の錦をたちや重ねん

五四四 かへる山おもひつるかのこしの海に契りやふかき春のかりか

ね

五二五 山さくらさきにけらしもみよしのゝ八重たつ雲に匂ふ春かせ

五六六 をはつせやみねはさくらにうつもれて入逢のかねに匂ふ山か

せ

五二七 白鳥のさきさか山の岩つゝしいはねと春の色はみえけり

五二八 ゆく春の名こりやすらふ村雨におる手露けき山吹の花

五二九 春の行みよしの川の瀬をはやみせくもかひなき花の岩波

五三〇 おしこしおなし名残のゆかりとて花の道より春や行らん

夏

五三一 すきにけり春も程なくしゐておる昨日の藤の露もひぬまで三十一オ

三十一オ

五三二 郭公はつ声さそふをととは川せき入る水の波のたよりに

五三三 夏きてもまたゆみはりの月草のうつりやすくもくらす春哉

五四四 いく年の天津日影にさらすらんたかてつくりの布引の滝

五四五 せきかくるをたの苗代水すみて畔こす波にかはつなく也

五四六 深山出(マ)ていつれのさとを契るらん曉ふかきほとゝきすかな

五四七 五月に水ゆきまさる飛鳥川瀬もみえぬ浪の通路

五二八 うは玉のやみにやはれんいたつらに月の比なる五月雨の空

五二九 続古はしたてのくらはし川にかかるすけのなき日くらしすゝむ比

哉

五三〇 天の川雲のみを行月なればなかれてはやくあくる夏の夜

五三二 ほたる飛あしやの浦のしほひかたあまのたく火のかすやそふ

らん三十一ウ

五三三 みたれあしのしたはなみよりゆく水の音せぬ浪の色そすゝし

風

五三四 かつ岡のあふちなみより吹風にかつゝそゝく夕たちの雨

五三五 みそき河ゆきかふ空やふけぬらん露なからおるあさの一ふさ

秋

五三六 このねぬるあさけのかせのをとめ子か袖ふる山に秋やきぬら

ん

五三七 秋はけふくるすのをゝまはき原また朝露の色そにははぬ

五三八 吹かへすまくすか原の秋かせにうら葉の露も今朝より吹

五三九 織女に今朝かすいとのうちかはへてよるも程なくあくる秋かせ

五四〇 山のはにふくれははるゝうす雲を待出で出る秋のよの月三十二オ

五四一 いなみのや草葉にすかる玉はこの道のなかに秋かせそふく

五四二 庭ふかきおきの葉分にもる月の心つくしの秋も有けり

五四三 初雁のとはたのくれの秋かせにをのれとすき山のはの雲

五四四 今朝みれば夜半の野分の浅茅生にあれて草はの露そみたるゝ

五四五 久かたの月かけきよしあまの原雲をわたる夜半の秋風

五四六 色かはる身を秋山となくしかの涙もふかきみねのゆふきり

五四七 露にふす野辺の千種の明はのにおきぬれて行さをしかの声

五四八 をく露のあたのおほのゝまくすはら恨かはなる松むしの声

五四九 秋風にのへのあしたは音もせて分ゆくあとそ露はこほるゝ

五五〇 月そすむたれかは霜と夕嵐雲吹はらふかつらきの山」<sup>33ウ</sup>

五五一 いたつらに人こそとはねおく山の霧よりふかきみねの紅葉は

五五二 深草やあかつき寒く吹かせにいとゝ身にしむきりくす哉

新後撰

五五三 おしめとも秋は末のゝ霜の下にうらみかねたるきりくす哉

五五四 なにとなく庭のよもきも下おれてさひ行秋の色そかなしき

五五五 秋はけふくれなぬくゝる竜田河神よもしらす過る月かは

冬

五五六 もみちはのこかれそわたる海士を舟初せの山はうちしくれつ

五五七 神無月しくれにくるゝ冬の日をまつ夜なければかなしともみ

す

五五八 わけいれととふ人もなし嵐山木葉ふりしく音はかりして

五五九 三室山しくれこきたれ吹風にぬれなからちる峯のもみちは」

五六〇 をしねほすふしみのくろにたつ鴨の羽音さひしき朝霜の空

<sup>33オ</sup>

五六一 霜こほるのたのうはてにせく池のみきはになひくしのすゝき

哉

五六二 雪ふれは岩はにしろくさく花のおられぬ色をあらふ浪哉

五六三 しほかれのひかたも遠しさ夜ふけてこほらぬ沖の浪そあれ行

五六四 首に聞くめのさら山さらくをのか名たてゝふるあられか

な

五六五 けふりたつおもひのしたやこほらんふしのなる沢音むせふ

也

五六六 おもひかね猶いもかりとゆきもよにわか友千とり空になく也

五六七 あけはつるあさちの霜にかけみえてほのかに残る庭の月哉

五六八 山人のみちのしをりと成にけりかへるたかねの松のしらゆき

五六九 ときは木につもれる雪をふりはてゝ杉のまともるかせのけ

しさ」<sup>33ウ</sup>

五七〇 すかもかる八十字治川の瀬をはやみ手にもたまらすくるゝと

しなみ

恋

五七一 我恋はたかまと山の雲間よりそにも月のかけを待かな

五七二 袖にやはせくとせかれんはや瀬川ゆくての浪は色みえすとも

五七三 もゝつてのやそのしまもり心あらは恋にみるめの行多知せよ

五七四 我こひはしつかさゝのやとまをあらみもりやしぬらん時雨ふ

る比

五七五 常磐木とたのめし人に秋立てことのはなから色かはる比

五七六 わすれめやちきる末野の梓弓とかりのゆつるたえははつとも

五七七 あたに行たなゝし小舟さしもやはうきたるなみの跡はたのま

し

五七八 おもひのみつもりのあまのうけのをのたえねはとてもよるか

たもなし」<sup>34オ</sup>

五七九 風吹はみ山にそよくさゝかきのいたつらおきのあかつきそ

き

五八〇 我恋はみなきる浪のあら磯に舟よりかねて心まとはす

五八一 うらみ侘わかひとりねのとことはにいはいれしまての思ひ出も

なし

五八二 月日のみすきのまさめのいたつらにあはすふきけん人や恨みん

五八三 から衣そてもひとつにくちにけりみしやその夜のまゝのつき  
橋

五八四 津のくにのなにはたゞまくをししか鳥したの思にこかれわひつゝ  
五八五 しかすかに人に心をおきつとりあふ事なみにうき名残すな

雑

五八六 久方のあまの露しもいくよへぬみもすそ川のちぎのかたそぎ  
五八七 千年ふるまつのみしけくみゆる哉たのむくらまの山のかひに  
は」<sup>34</sup>ウ

五八八 はつせめの袖かとそおもふ御芳野のたきのみなはの浪の夕暮  
五八九 谷ふかく朝ある雲やみちぬらん麓にみえぬときは木の峯

五九〇 みさこあるいはねの松のいかにしてあれたる波に年の経ぬら  
ん

五九一 朝日いてゝ空よりはるゝ川霧のたえまにみゆる遠の山本  
五九二 あま乙女しはやきめかりしかのうらにつけのをくしもとるま  
なき比

五九三 山ふかみねさめの友としつたまきかすにもあらぬすまひなれ  
共

五九四 ふりぬれはいはやもまつも哀也むかしの人をみる心ちして

五九五 あけゆけは木かけはくらぎみ山路に横とひこゆる鳥の一こゑ

五九六 哀なるあかつきちかくいつる月のくもらぬ空も麗なるかけ

五九七 心すむ色をやこゑにたくふらん入相の鐘にすくるうき雲」<sup>35</sup>オ

五九八 宮こには山の端とてや詠らんわかすむ峯をいつる月影

五九九 難波えやあしのはしろくあくる空に浪うつ鳥の遠さかり行

六〇〇 み渡せばむらの朝けそ霞行民のかまとも春にあふ比

— 金沢大学教育学部講師 —

国語国文学会 会員近著紹介

稲田利徳・佐藤恒雄・三村晃功編 『中世文学の世界』

本書は、和歌文学・軍記物語・説話文学・随筆文学・五山文学  
について、六章にわたって八人の方々の論考を収めたものである。

そのうち三村晃功氏は、第一章和歌文学の諸相で「私撰集」私  
家集名を冠する撰集」を執筆され、私歌集名を冠する中世の私  
撰集が既存の歌集からの抄出で撰集された二次的撰集であること、  
類題歌集の側面を有すること、などを指摘されている。（世界思  
想社 昭和59年5月20日 一九〇〇円 二六六ページ）

大槻修著 『王朝の姫君』

第一章平安の都の風土と文化に始まって、第十五章はかなげな  
女の悲恋の物語まで、氏は数多くの実在・非実在の女性達を取り  
上げられる。義兄への不倫の恋に苦しむ寝覚の上、実子いじめさ  
れる『こわたの時雨』の中の君、男性遍歴を重ねる『有明の別れ』  
の中の中務卿宮北の方や和泉式部、更に夕顔や浮舟のはかなげな  
女の系列等が考察される。（世界思想社 昭和59年10月30日 一  
九〇〇円 二四二ページ）